

2025 年度(前学期)学生による授業評価アンケートについての総評

2025 年 8 月

浦安キャンパス FD・SD 委員会

2025 年度前学期に浦安キャンパスで行われた「学生による授業評価アンケート実施結果」(各学部学科および各センター)の集計結果について、以下のような総評を提示する。

アンケート実施の概要

(1) 実施期間等

*HT 学科(GMM)ST1 科目：2025 年 5 月 14 日(水)～5 月 27 日(火)

→アンケート集計値を Web ポータルシステムで公開 ⇒ 05 月 28 日(水)

*HT 学科を除く全学科：2025 年 6 月 25 日(水)～7 月 8 日(火)

→アンケート集計値を Web ポータルシステムで公開 ⇒ 7 月 9 日(水)

* 中間フィードバック：講義期間中の任意の時期(講義担当教員の裁量によって実施時期を決定した)

→(授業改善の PDCA サイクル促進のため、教員は授業期間中の任意の時期に授業評価以外の任意の方法で学生から授業に関する意見等のフィードバック(中間フィードバック)を受け、それを可能な範囲で当該学期中の授業改善に取り入れ、過去の事例を含め、改善された事項等を学生に伝えることとした。集計結果分析及び授業改善策の作成に際しては、その結果について記載するよう努めた。)

(2) 対象授業科目

* 各教員がアンケート実施時期に担当している全講義を対象とした

(ただし、ゼミ科目、履修者数 5 名以下の授業科目および再履修者のみが履修する授業科目を除いた。また、1 教員あたり同一名称の授業科目が複数ある場合、履修者最多の授業科目を対象とする。なお、FD・SD 委員長が必要と認めた授業科目は追加した。)

(3)実施方法

＊講義受講生は、アンケート実施期間中に、PC やスマートフォンなどを利用して、アンケートの回答を行った。

＊アンケートは、全講義の共通設問に加え、設問内容を講義担当教員が自由に設定できる設問(B-1・B-2)を設定することができ、このアンケートを実施する場合は、教員はアンケート実施期間初日の前日までに、manaba のコースニュースによって受講生に質問内容を伝えた。

→HT 学科(GMM)ST1 科目：5 月 13 日(火)

→HT 学科を除く全学科：6 月 24 日(火)

(4)周知方法

アンケート実施についての概要は、実施期間 1 週間前までに Web ポータルシステム等で学生および教員に周知した。

→HT 学科(GMM)ST1 科目：5 月 7 日(水)

→HT 学科を除く全学科：6 月 18 日(水)

(5)その他

アンケートの内容、集計、公表、事務およびその他の事項は、「2025 年度学生による授業評価アンケート実施に関する取扱い」に従った。

(6)回答区分

アンケートの設問に対する回答は、5 段階評価(5. 満足、4. やや満足、3. どちらともいえない、2. やや不満、1. 不満)で行われた。

(7)アンケート集計結果等の活用方法

アンケート集計結果等は、次のような用途に活用される。

＊担当教員の授業改善努力の促進

＊担当教員への授業改善の提案

＊カリキュラム改善のための基礎資料

＊FD・SD 活動のための基礎資料質問項目

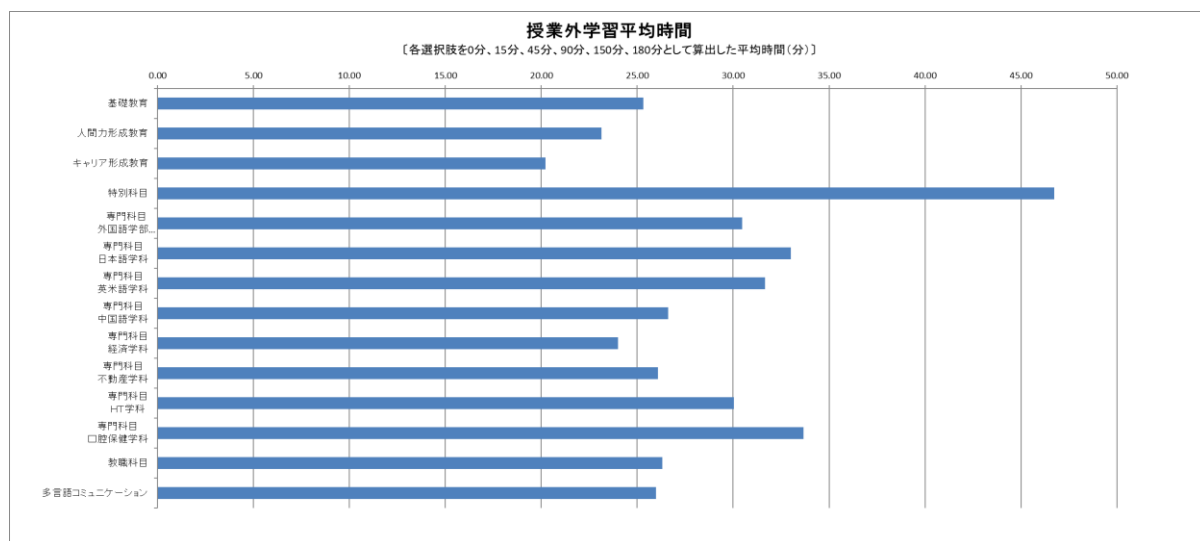
アンケート結果の考察

表 1：科目区分別アンケート集計結果

2025年度前期授業評価アンケート集計結果(科目区分別)																明海大学浦安キャンパスFD・SD委員会	
		全体	基礎教育	人間力 形成教育	キャリア 形成教育	特別科目	専門科目 外国語学部 65国語科目	専門科目 日本語学科	専門科目 英米語学科	専門科目 中国語学科	専門科目 経済学科	専門科目 不動産学科	専門科目 IT学科	専門科目 口腔保健学 科	教職科目	多言語コミュニケーション	
対象科目数		564	21	56	16	16	29	29	60	21	95	46	79	31	18	47	
履修者数		22,508	614	3,397	621	261	1,077	1,228	1,465	251	6,156	2,826	1,898	1,279	382	1,053	
回答者数		9,220	333	985	345	181	450	571	683	173	1,828	959	1,142	742	223	605	

質問 No.	質問文	基礎教育	人間力 形成教育	キャリア 形成教育	特別科目	専門科目 外国語学部 65国語科目	専門科目 日本語学科	専門科目 英米語学科	専門科目 中国語学科	専門科目 経済学科	専門科目 不動産学科	専門科目 IT学科	専門科目 口腔保健学 科	教職科目	多言語コミュニケーション
	平均時間(各選択肢を0分、15分、45分、90分、180分として算出した平均時間(分))	25.32	23.14	20.22	46.74	30.47	33.00	31.65	26.42	24.00	26.08	30.03	33.66	26.30	25.97
A-1	1 板書(スクリーン)の文字・画像等・配布物は読みやすかったですか	4.49	4.36	4.47	4.80	4.43	4.69	4.44	4.58	4.44	4.23	4.53	4.26	4.63	4.52
	2 教員の説明はわかりやすく、授業の進み具合は適切でしたか	4.51	4.37	4.46	4.80	4.38	4.68	4.44	4.53	4.44	4.22	4.53	4.26	4.60	4.52
	3 授業の内容をよく理解できましたか	4.21	4.26	4.27	4.69	4.27	4.57	4.25	4.33	4.30	4.03	4.39	4.10	4.51	4.40
	4 教員の学生への対応(質問等)は適切でしたか	4.49	4.34	4.51	4.76	4.36	4.66	4.44	4.54	4.47	4.27	4.50	4.24	4.58	4.52
	5 授業はライブの内容に沿って実施されていましたか	4.48	4.39	4.52	4.71	4.44	4.66	4.47	4.46	4.52	4.30	4.52	4.38	4.55	4.47
	6 この授業で興味や関心が深まりましたか	4.18	4.30	4.27	4.67	4.23	4.58	4.27	4.39	4.33	4.14	4.44	4.13	4.58	4.38
	7 この授業に対するあなたの満足度をお答えください。	4.42	4.35	4.32	4.70	4.32	4.69	4.35	4.46	4.39	4.20	4.51	4.17	4.62	4.48
B-1	8 (教員自由設定項目)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
B-2	9 (教員自由設定項目)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

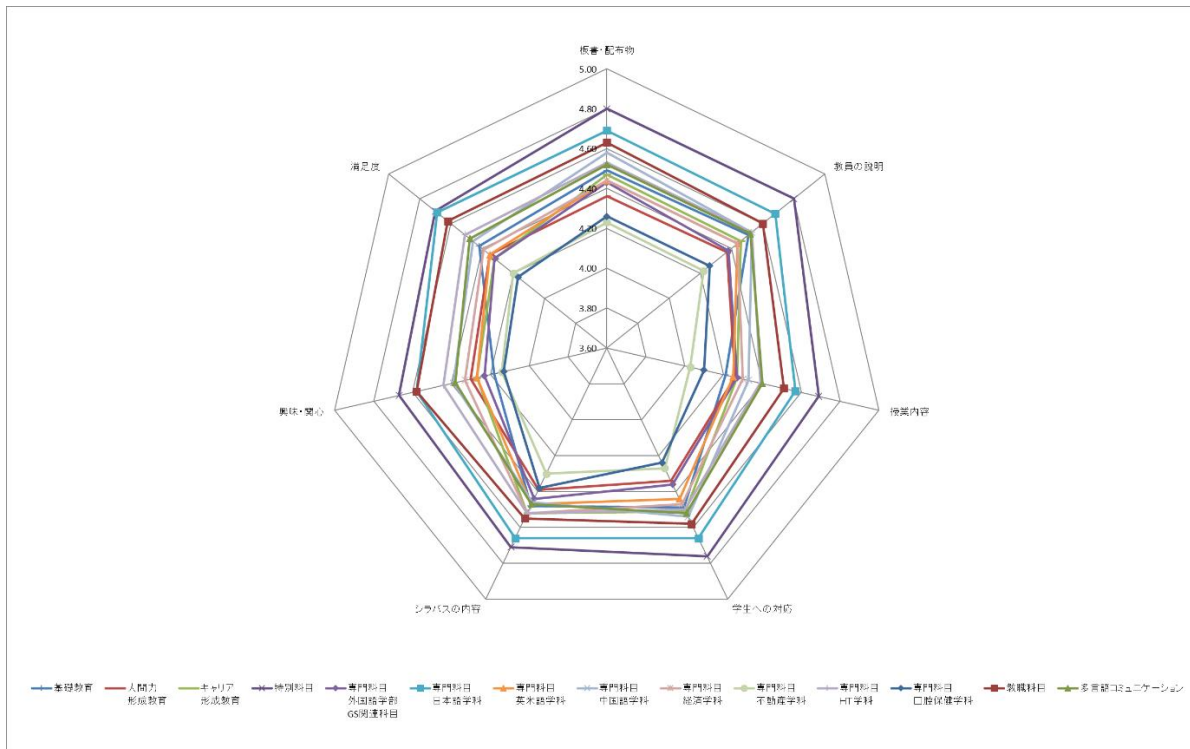
図 1：授業外学習平均時間



(1) 履修者数および回答者数について

表 1 は、浦安キャンパスで講義を提供する全部署における、科目区分別アンケート集計結果を示したものである。履修者数は延べ 22,508 人、回答者数は 9,220 人となった。表には回答率は示されていないが、前述の人数から単純に算出される回答率は、約 40.96%となる。本年 4 月 24 日における浦安キャンパス FD・SD 委員会で報告された、浦安キャンパスアンケート回答率推移表(2017 年度以降)に提示された数値と比較すると、少なくとも現行のアンケート実施形態に移行後では、今回の回答率は高い部類に入るといえる。

図 2：アンケート設問別回答平均値(部署別)



一方で、回答率のさらなる向上は、より信頼性の高いデータを得るうえで全学的に取り組むべき共通目標であり、引き続き工夫・改善を重ねていくことが期待される。

東(2018)は、学生調査においては、回答率が 20%程度であっても、その大学の学生全体の学修行動の質的な特性を把握できることは多いが、そのような場合、少数の際立った特性が強調されやすく、安定的な結果を得るためには、やはり 60%程度の回答率が求められると指摘している。この点については、以下の論文に興味深い考察が展開されている。

＊東 京一(2018)「学修行動調査における回収率とその結果の関係―回収率 3 割や 6 割の調査結果は何を伝えるか」『第 7 回大学情報・機関調査研究集会論文集』, pp.20-25. (DOI: https://doi.org/10.50956/mjir.7.0_20)

(2) 平均学習時間について

図 2 は、授業外の学習平均時間(部署別)を示している。最大値でも 50 分に満たないという結果となった。学生は平均的に、1 セメスタあたり概ね 20 単位、またはそれ以上の履修申告をしており、各講義で課される課題や宿題に取り組むだけでも(良質な成果を想定する限り)50 分(あるいはそれに満たない時間)では対応しきれないケ

ースも生じうる。今回の数値は、回答者が「授業外学習時間」をどのような範囲で捉えて回答したかによって左右される面があり、今後は設問の定義をより明確にすることで実態をより正確に把握できると考えられる。

(3) 設問別回答平均値について

表 1 の中段および図 2 は、アンケート設問別回答平均値(部署別)を表している。結果として示された項目の全数値が 4 を超えており、これは回答した受講生が浦安キャンパスの講義を全体的に高く評価していることを示しており、各部署教員の授業改善への取り組みの成果として前向きに受け止めることができる。ただし、東(2018)の指摘も踏まえ、設問設計の精緻化や分析手法の工夫によって、より多角的な考察につなげることが今後の課題といえる。また、回答率が 40% 台であることを考慮すると、回答者層の多様化を図り、より代表性の高いデータを得ることが今後の目標となる。引き続き回答率向上に向けた取り組みを進めることで、さらに精度の高い授業評価の実現が期待される。

(4) 講義担当教員によるアンケート結果に対する<以前からの課題>・<中間フィードバック>・<改善案>・<学生向けのコメント>について

講義アンケートの結果を検討する際は、学生が示した回答の数値のみならず、教員が提示した、集計結果に対する<以前からの課題>・<中間フィードバック>・<改善案>・<学生向けのコメント>の内容を検討することも必要であろう。

上記の項目については、教員が学生のより良い学習環境の実現に向けて、日々真摯に向き合っている様子が報告されている。本報告書では、その一端を紹介するが、現場の教員が学生の成長を願って工夫と努力を重ねている姿を読み取ることができる。

まず、受講生の私語についての指摘がある。注意しても私語を止めない者がおり、他の受講者からの苦情もあったことが報告されている。

出席記録の運用についても、改善の余地が指摘されている。たとえば、講義中に respon による出席確認を行っている場合、実際には参加していない学生が不正に出席登録するケースへの対応が課題として挙げられている。正直に取り組んでいる学生の公平性を守るためにも、respon のシステム面での改善策を検討することが、公正な学習環境の構築につながると考えられる。

課題への取り組み方についても、改善に向けた指摘がある。オンライン課題では、複数の受講生から類似した解答が提出されるケースや、設問の意図と異なる回答が見られるケースがあることが報告されている。学生が自らの力で課題に取り組み、理解を深める習慣を育てることは、学修成果の向上に直結する。課題設計の工夫や学習リテラシー教育の充実を通じて、主体的な学びを引き出す取り組みが求められる。

これと類似した問題として、課題に Chat GPT を使い、そこで得られた情報をそのまま貼り付けた答案を提出する学生に注意を行っても、改善が見られなかったという報告もあった。また、提出された課題が、友人のものをコピペしただけという学生がいるという指摘もあった。このような問題は、各講義内の注意喚起だけでは、改善の効果に限界があると思われる。

授業中のスマートフォン使用や受講態度についても、真摯に学ぶ学生の環境を守るという観点から、複数の教員が改善を求める声を寄せている。教員が個別に対応するには限界もあることから、授業マナーに関するルールを大学全体で明示し、学生に周知していくことが、すべての受講生にとってより良い学習環境の実現につながると考えられる。

こうした授業環境の課題に対しては、講義時間内だけでなく、大学全体として、受講マナーの向上を促す仕組みを整えることが有効である。入学時オリエンテーションや学修支援プログラムなどを通じて、受講態度や学習倫理に関する継続的な教育を行うことで、全学生が主体的・誠実に学ぶ文化を育てることが期待される。

学習意欲や自主性についても、さらなる育成が期待される点として報告が寄せられている。「事前学修に時間をかけてほしい学生が一定数いる」、「最初から難しいと感じている学生に対して、教員の話聞き、教科書を持参し、manaba での指示を積極的に確認する習慣を身につけてほしい」という教員の願いが込められている。また、外部講演者への礼儀や、資料の準備・板書の記録など、学びに向かう姿勢の基礎を丁寧に伝えていくことの大切さが、多くの教員から共有されている。

一方、授業運営における工夫の余地として、グループワークの設計や、学生の理解度・参加度を高める働きかけについての声も寄せられている。「多様な学生が共に学ぶ中でグループワークをより効果的に進めたい」、「学生の好奇心を引き出す授業づくりを模索したい」、「学生が自ら積極的にコミュニケーションを取りやすい環境をつくりたい」といった教員の意向は、いずれも教育の質向上を目指す前向きな姿勢の表れである。こうした課題は各講義内だけでの解決が難しい側面もあるため、FD 活動や学修支援の充実を通じて、

大学全体として中長期的に取り組む価値のあるテーマである。

アンケートの結果に基づく今後の課題と残存する問題

この報告書では、上記のように、2025 年度前学期における講義アンケートの集計結果を通じて、浦安キャンパスの授業運営における現状と今後の展望を考察した。全体として、受講生による講義評価は高い水準にあり、各部署の教員が授業の質向上に真摯に取り組んでいることが確認された。また、教員から寄せられた多くの声は、学生のより良い学びを実現したいという強い意志の表れでもある。アンケートの実施方法や質問項目についても、継続的な見直しを通じて、より実態を反映したデータが得られるよう改善していくことが期待される。

それらは、FD・SD 委員会、および、他の委員会において、積極的な議論を経て改善させるべきものと判断する。特に、学生の講義受講態度にかかわる事項は、全学的な取り組みによって対応すべき問題であると考えられる。